

# 「大坂ノ陣」・敗者の文学

—— 例えば「大坂籠城記」「大坂落城記」など ——

青 木 晃

(一)

慶長十九年、大坂冬の陣の直後に「大坂物語」一巻本が版行され、翌二十年夏の陣の後ではその合戦譚一巻が追補されて二巻本が上梓されたことは、夙に知られている。<sup>註(1)</sup>

しかし、それらの版行は大方徳川方の視点に立つものでも、至極当然のこと、合戦の顛末を語る情報源も勝者の陣営から出たものであったのだろう。そこで、私は以前に、今日なお写本で残る敗者豊臣方の色彩をもつ「大坂物語」(天理図書館蔵)を翻刻紹介した<sup>註(2)</sup>ことがあった。

そして、大坂ノ陣を描く文学世界の鳥瞰図如きを示して、その大流は「大坂物語」から発して大きく編纂された読物群へと向うこと

を押えようとしたのである。<sup>註(3)</sup>それら読物は、「難波戦記」「浪花軍記」(戦記・軍記の呼称は随時入れかわることがあって、—— 大全に至る)であり、更に「元和軍記」上下二巻、「元和老花軍記」全二十七巻、「大坂軍記及附録」十巻、「厭蝕太平楽記」全三十巻などとなる。

この大流の一端に位置しながら、敗者豊臣方の視点により成立した作品として、ここに「大坂籠城記」「大坂落城記」や「豊内記」などをとりあげて、敗者の文学世界の構造をのぞいてみようという試みがこの小文である。

(二)

未だに翻刻刊行されていない内閣文庫所蔵「大坂籠城記」の、終

章「秀頼公御生害之事」をまず例示しよう。(但し、句読点は私に付し、丁付けは示さない)

「大坂籠城記」(終章)

秀頼公御生害之事

秀頼公ハ、猶御出馬可有ヤト御見合ノ所へ、真田大介・毛利豊前守ヲ始トシテ、敗軍ノ士卒追々ニ馳帰ル。是ヲ見テ、城中所々ヲ堅メケル集リ勢時ノ間ニ落失テ、寄手ハヤ討入ヌト申ケレハ、秀頼公奥ノ御所ニ入玉フ。郡主馬ハ千疊敷ヘ参リ、具足ヲ脱、甲臙當マテ正ク置合、太閤以來預ル所ノ黄母衣ノ床ニ立置、扱郎等ヲ招テ「汝介錯シテ此臙指ニテ腹ヲ切タル由、黒田筑前守ニ申届ヨ」ト云合テ、腹十文字に掻切りケル。是ヲ見テ、成田兵藏・真野宗信・中嶋式部少輔ナト續テ腹ヲ切タリケル。又、野々村伊与守・堀田図書ハ南表ノ合戦ニ戦ヒ疲レテ飯リケルカ、城中ニ火掛リケレハ、本丸ヘハ入得スシテ、本丸ト二ノ丸トノ間ナル石壁ノ上ニテ一度ニ自害ソシタリケル。津川左近モ飯参リテ申ケルハ「御馬印岡山マテ押上ケ、大敵ヲ切崩候得共、御方裏崩レシテ及敗軍、是非ナキ次第也。先陣マテ打死可仕事ニ候ヘトモ、御馬印ヲ敵ノ手ニ渡サン事モ口惜ク、又イカナナル御計ヒ可有ト是迄引取り候」ト申シ上ル。秀頼公「神妙ナリ」ト御感アツテ、「サラハ生害ノ用意仕レ。御母堂ノ御方ヘモ

此旨傳ヘヨ」ト仰アリケレハ、今木源右衛門淀殿ノ御方ヘ参リテ此由申上ケ、天守ニ上リ、「御用意已ニ能ク候」ト秀頼公ヘ申上ケレハ、竹田水翁ニ「諸道具不殘天守ヘ入テ燒草ニセヨ」トソ仰付ラレケル。此間ニ、家康公ヨリ、秀頼公御母子ノ御命ハカリハイカニモシテ御救ヒナサレタキトノ御使也。大野修理亮・速水甲斐守是ニ取合ヒ、度々秀頼公ヘ申上ケレトモ、曾テ御用ヒナカリケリ。甲斐守存ル旨アリテ、秀頼公ヲ月見橋ヘ移シ奉リ、淀殿ヲハ東ノ矢倉ヘ入レ奉ル。渡辺内藏助ハ秀頼公ノ御前ニ畏リ、「昨日ノ合戦ニ痛手ヲ負、御供ニ難堪候条、御先仕候」トテ、腹掻切テ伏ケレハ、母ノ正水是ヲ見テ、「我ヲモ介錯シテ給レ」ト佯ヒケレハ、今木源右衛門立寄、頭ヲ刎テケリ。阿茶ト申老女、阿井ト申侍女、尼一人、「同道ニ成シテタヘ」ト云ケレハ、皆一々ニ害シケリ。秀頼公御覽シテ、「我一人ノ為ニカク成行事ノ不便サヨ」ト、名ヲ委細ニ問玉フ。淀殿ハ待佗サセ玉フトテ、御使度々成リケレハ、秀頼公東ノ矢倉ヘ入玉フ。淀殿ヨリハ、京極若狭守・渡辺長左衛門ニ何ヤラン仰アツテ、御使ニソ出シ玉フ。秀頼公、速水甲斐守・毛利豊前守・氏家内膳正ヲ召テ、「敵寄セ来ラハ討テ出、最後ノ合戦セハヤト思ヘトモ、皆人戦疲レタリ。由ナキ事ヲ仕損シ、不覚有ンモ心許ナシ。只、母公ト一度ニ心滑ク自害シテ、死骸ヲ深く隠スヘシ。速水ハ母公ヲ介錯セヨ。氏家ハ我ヲ介錯シ、毛利ハ幼キ子トモヲ殺スヘシ。其外ノ

者トモハ、櫓ノ外ノ番ヲセヨ。我ハ暫ク目睡テ、其後切腹スヘシ」

トノ玉ヒテ、小姓ノ膝ヲ枕トシテ、大駟キ搔テ定リ玉フ。饗場局・

宮内卿・右京大夫ハ淀殿ノ御前ニ指寄り、「時至ラハ物騒シクモ侍

ラン。只今此世ノ御暇ヲ申上ル」トテ、涙ニムセヒテソ立ニケル。

家康公ヨリハ、「秀頼公ノ御供ノ姓名、悉ク記シサシ越スヘシ。二

位局ニハ御尋ノ事アリ、可呼出」ト片桐市正ニ仰ケレハ、市正カ

郎等梅戸忠介ト云者ヲ御櫓ヘソ遣シケル。此由申ケレハ、

淀殿御供

大蔵卿 饗場局 宮内卿

右京大夫 和期 玉

秀頼公御供

速水甲斐守 速水傳記

氏江内膳正 津川左近

毛利豊前守 毛利長門守

武田左吉 森嶋長次

伊藤武蔵 加藤弥平太

堀對馬守 真田大助

高橋半三郎 高橋十三郎

土肥庄五郎 垣原八蔵

垣原三十郎 寺尾勝左衛門

片岡十右衛門 小室武兵衛

中高将監 中高半兵衛

竹田永翁 大野修理亮

大野信濃守

已上二十五人

京極備前守 今木源右衛門

別所孫右衛門

此三人ハ、御使ニ遣サルヘシト書記シテソ被レ出ケル。

楮、秀頼公ハ御眠覚テ、先豊国大明神ノ方ヲ伏拝ミ、後ニ淀殿ノ御前ニ膝ヲ立サセ玉ヒ、後ノ世ノ莫<sup>モ</sup>仰アツテ、甲斐守ニ目クバセ仕玉ヘハ、アヘナク害シ奉ル。秀頼公ハ、骨啄ト申御脇指ヲ以テ御腹切セ玉ヘハ、氏江内膳正御首ヲ落シ奉ル。御供ノ人々ハ、思ヒ思ヒニ自害セリ。誰ヤラン、火ヲ懸ケ、レバ、猛火頻リニ燃ヘ上リ、一時ノ煙ト成玉フ。抑、太閤秀吉公明智ヲ誅伐シ玉ヒシヨリ、爰ニ至ツテ三十餘年、豊臣ノ正脉絶ニケリ。是モ時節ト云ナガラ、哀レナリシ事トモナリ。

大坂菴城記 終

(三)

「大坂籠城記」目録を示して、その構成をみるに――

- 一、秀頼大坂御在城之事
- 一、大佛供養評定之事
- 一、片桐市正駿府下向之事
- 一、籠城用意之事
- 一、城中雑説之事
- 一、今福合戦之事
- 一、鳴野合戦之事
- 一、玉造口豊志谷合戦之事
- 一、城中ヨリ蜂須賀阿波守陳（ひら）今夜討ノ事
- 一、秀頼公関東御和睦之事
- 一、秀頼公軍評定之事
- 一、再御和睦御沙汰之事
- 一、所々放火之事
- 一、榎井合戦之事
- 一、道明寺合戦之事
- 一、八幡山合戦之事

一、矢尾久宝寺表合戦

一、山田合戦之事

一、五月七日所々合戦之事

一、岡山合戦之事

一、秀頼御生害之事

并御供武士姓名之事

とあって、ほぼ「大坂物語」に準ずるのを知る。今福・鳴野・玉造口の合戦が描かれて、一旦の和睦……そして榎井・道明寺・八幡山・八尾久宝寺・山田・岡山の合戦描写が続くとなれば、「籠城記」が文字通りの狭い意味にとられるべきものではなく、大坂城方との謂いであると認められよう。

その大尾の章（前掲）を「大坂物語」第四種本（二巻二冊）に較べみて、一番大きな相異点は、「大坂物語」の方は攻め寄せる徳川勢諸將の合戦譚が主で、中に守勢大坂城方武將の奮戦と討死の物語がはさままれる構成をとっていることである。黒田筑前・加藤左馬・真田佐衛門佐・郡主馬・成田兵藏・毛利河内守・渡辺内蔵助とその母正永などが描き込まれたその名で、あとは秀頼公と母淀殿の最期の時の大物側近の武將たちと上臈女房ということになる。

「籠城記」終章の城内所々の最期の描写に登場する人々は三十一

名(後に提出された淀殿・秀頼公「御供」名簿註10は除く)、落城に至つて永く豊臣家断絶という結末になるのであつた。「大坂物語」にも描かれた城方諸將は、当然この三十一名の中に含まれている。

× × ×

時を経て、編纂された『豊内記』(別)に「秀頼事記」とも)にもこの大坂落城をみて、その比較の一端から実録風説物化の筋道を追つてみよう。

『豊内記』大尾の二章、「秀頼公出馬之事」後半から「秀頼公生害」に渡る部分が、「籠城記」終章にあたる。

(四)

真田・毛利らが敗軍の報をもつてあわただしく帰城、その城内でまず第一に腹掻き切つて果てたのは郡主馬なるもの、その描写例を揚げよう。

「籠城記」の場合……太閤以来預ル所ノ黄母衣ノ床ニ立置(キ)、  
 切郎等ヲ招テ、

「汝介錯シテ、此脇指ニテ腹ヲ切タル由、黒田筑前守ニ申(シ)  
 届(ケ)ヨ」

と云合(メ)テ、腹十文字ニ掻切リケル。

とあるのは、前掲翻刻本文の通りである。

「豊内記」郡主馬助最期の場面は……

郡主馬助ハ代々弓箭ニ面目有者ナリ。太閤相国ノ御時ヨリ、其身不肖ニ候ヘトモ執シ給テ、黄母衣ヲサ、セ給フ。

去年籠城ノ折節モ、藤堂和泉守御先手ヲ仕リ天王寺表へ着陣ノ時、秀頼公ノ御前ニテ、「敵寄来リ候。手勢スクナク候間、一頭一所ニ被仰付候者、先手ヲヒトマツ追崩可ク候。不然ハ御籠城ノ規模有間敷フ存候」ト云ケレハ、未合戦ニ馴ヌ若武者トモ兎ヤ有ン角ヤアラント申テ、其事モ止ヌ。

今日南表敗軍ノ後、千帖敷ハ參(リ)、具足ヲ脱(キ)、甲臈充ニ至マテイカニモ正ク置合、サテ脇指ヲ拔持テ郎等ニ申様、

「我代々弓箭ヲ取テ、人ニ不劣。只今切腹ニ及間、介錯ヲ仕、此脇指ヲ黒田筑前守ヘ持テ參(リ)、是ニテ腹ヲ切タル由ヲ可申」  
 ト云置テ、腹十文字ニ掻切ケル。

となる。郡主馬の人物が語られ、去年籠城時のエピソードも語られて、郎等に云い置く詞も長い。彼の後を追つた成田兵藏・真野・中島なる者、また本丸と二の丸の間の石壁の上にて自害して果てた野々村・堀田など、「馬廻ノ組頭」であつたことも「豊内記」にて知るのである。「豊内記」は、郡切腹の後に、かくの如き評を入れる。

平生此人ノ行跡ハ、丸ク角ナク、又茶ノ湯ヲ好ミ、カリニモ物ノ横シマ成ヲキラヒ、正シク置合スル者也。其心不乱、此時モ又

如此。

このような趣向を、私は読物化と認めている。

× × ×

もう一人、渡辺内蔵助（とその母）の例を見よう。

〔籠城記〕

渡辺内蔵記ハ秀頼公ノ御前ニ畏リ、

「昨日ノ合戦ニ痛手ヲ負、御供ニ難堪候条、御先仕候」トテ、

腹掻切テ伏ケレハ、母ノ正永是ヲ見テ、

「我ヲモ介錯シテ給レ」ト詫ヒケレハ、

今本源右衛門立寄（リ）、頭ヲ刎テケリ。

〔豊内記〕

渡辺内蔵助御前ニ参リテ、

「昨日手ヲ負、御供ニタエカタウ候」トテ、腹掻切伏ケレハ、母

ノ正永是ヲ見テ、

「我ヲカイシヤクシテ給レ」ト申ケレハ、源右衛門尉頭ヲ刎テケ

リ。

ほとんど変らない。この後、三人の女房がのぞんで同じ道をたどる

のも変らない。ほぼ同文——このような例もまた多く、同系統の物

語世界に属する作品群であると私は考えている。

× × ×

次に、秀頼の詞を拾ってみよう。

①南表の敗軍から帰り着いた津川将監や今本源右衛門らの言上を聞

いて——

我此時ニ心後レツカイヲヌカシ候ハ、死後ノ悪名疑ナシ。抑

此事催シ立シ始ヨリ、思ヒ儲テ有間、今更心ヲ動スヘキニ非ス。

母公ノ事心元ナシ。汝ハ急キ與ヘ參、殿守ヲコシラヘヨ。母諸ト

モニ切腹スヘシ。

②殿守の用意が出来たと聞き、永翁を召して——

諸道具不殘殿守へ上ケ、焼草ニセヨ。

——母公へ、

御一所ニ殿守へ上リ給へ。

③母の諫めを聞いて——

仰ハ去事ニ候ヘトモ、運命早究リタリ。ナカラヘテ我世ノ衰ハ

ヲ見給ハンヨリ、同シ道ニ急キ、後世ヲ楽ミ給フヘシ。百年ノ榮

花モ、一睡ノ夢ト成果ル習ナリ。

④渡辺の母や侍女三人の死を見て（前述）——

我独（リ）ノ為ニ、皆人カク成行事ノ不便サヨ。

⑤東の矢倉で供の人々（二十八人）をつくづくと見て——

我、太閤の子ト生レ、天下ヲ知ヘキ身ナレドモ、天運究リ、今

朝マテ十萬ノ大将タリシカ、今殘（ル）処廿八人ナリ。

⑥また、速水・毛利に――

敵寄来ハ討テ出、最後ノ合戦セハヤト思ヘトモ、皆人戦ヒ疲タリ。由ナキ事ヲ仕損シテ、不覚ノ有ランモ心元ナシ。只母公ト一度ニ心消ク自害シテ、死骸ヲ深く隠スヘシ。汝(速水)ハ母公ノカイシヤクセヨ。氏家ハ我カイシヤク、毛利豊前守ハヲサナキ子共殺スヘシ。其外ノ人々ハ矢倉ノ外ノ番ヲセヨ。我ハ少シマトロミテ、其後切腹スヘシ。

【豊内記】は、別称「秀頼事記」という如く、豊臣家における秀頼と母公とのかわりが書き込まれている特色を有する。ここでみても、①前半、③、⑤が「籠城記」にはみあたらない。

(五)

【籠城記】結句は、次の如くである。

抑、太閤秀吉公明智ヲ誅伐シ玉ヒシヨリ、ココニ至ツテ三十餘年、豊臣ノ正脉絶ニケリ。是モ時節ト云ナガラ、哀レナリシ事トモナリ。

【豊内記】――

痛ハシキカナ此君、多年ノ望ヲ空(ク)シテ、廿三歳ヲ限ニ、一時ノ煙ト立登リ給ヒ侍リケル。

「哀レナリシコト」として籠城――落城の戦いが語られるのは、あ

る意味で軍記物の常といえよう。そのようなものとして、「大坂籠城記」は成った作品であると考えておく。軍記の中から、武将(英雄)一代記が生み出されてくる例――源平の合戦譚の中から、義経の一代記が出てくることが想われる。

【痛ハシキカナ、此君】の物語が【豊内記】の視座なのである。秀頼の多くの詞の存在を、私は指摘した。

× × ×

【大坂落城記】は、表紙に――

大坂夏御陣記ト同書ニシテ、大坂夏御陣ノ下冊ヲ割テ成巻者也。大坂軍記ノ下巻ナリ。

なる付箋を有する写本一冊である。要するに、「大坂夏御陣記」または「大坂軍記」の下巻部から独立した一篇なのである。

落城の際に、特色的な描写を持つわけではなく、一つ書きで事実を述べていく。慶長二十年五月八日天下統一統に帰し、枕を泰山の安きに置くこと、大御所の功德として――

朝廷其功ヲ貴ミ、忝も東照大権現と号し、其後後光明院御宇慶安元年戊子四月、宮号ヲ下賜、萬人も徳を頌する者也

と、大尾を結んでいるのである。宝永元年五月の書写(奥書)<sup>(注6)</sup>、あまり大阪城方に片寄っているとも云えまい。

ごく少ない例示で、全体が云えるのかどうか……今後、登場人物

の言動を主に、「山口休庵咄」等に比してみることも必要になるう。只今、私共は「戦国軍記事典」を編んでおり（和泉書院より刊行）、編纂物の大きな作品のほか、家ノ記・戦場記や聞書・覚書ノ類などジャンルを立てて整理しているのです、そこでは今木家の合戦譚などが面白いものといえるかもしれない。今木源右衛門は、「大坂軍記」（別称：今木家伝集）四巻四冊の著者でもある。

〔98・9・30記〕

注(1) 川瀬一馬「大坂物語の研究」〔書誌学〕第一巻四号。

〔増補古活字版之研究〕〔大坂物語〕の項）'67・12月刊。

注(2) 「ビブリア」誌（天理図書館発行）82号、'84・5月刊。

注(3) 「大坂ノ陣の文学世界」〔軍語物語の窓〕第一集、関西軍記物語研究会編、和泉書院、'97・12月刊）

注(4) 徳川家康公（または両御所）の命により、片桐市正方より

提出された「御供」名簿は、淀殿に六名、秀頼公に二十五名、その他三名で、両書にその名一致する。ただ、秀頼公御供一名のみ〔籠城記〕Ⅱ氏江内膳正、〔豊内記〕Ⅱ荻道喜とある者）異なるのである。

注(5) 統群書類従所収本（巻第五百八十五）

注(6) 奥書は――

宝永元年

申ノ五月

於東武写之

小笠原為助

源宗辰

トアリ

（あおき あきら／本学教授）